第十三話

まぼろしの草木城

竹林城

ここは、伊勢の鈴鹿峠。はるばる尾張草木の里から、丹後の旧領へ帰っていく主君を送ってきた家老の池田嘉右衛門をはじめ十数人の人々は、ほほをつたう涙をぬぐいもせず、ひざまずいて、主君一色千徳の顔を仰ぎ見るのでした。

「……殿、お名残り惜しくは存じまするが、ここでお別れ申し上げまする。無事ご帰国のうえは、何とぞお心安らかに、お身を全うなされませ……。」

「皆の者、よくぞはるばるこの遠地まで見

送ってくれた。今までの忠節、生涯忘却せぬ……。

思えばわしが、大野の宗家の命により、草木竹林の地に出城を築いてから、わずか二十数年、応仁の大乱に世はすべて変転極まりなく、わが一族も骨肉相争う中、家臣佐治がために実権を奪われ、宮山城を退転いたすことになったにつき、わしも宗家のお伴をして丹後へ帰らねばならなくなった。

それにつけても、心残りは、そなたたちの行く末じゃ……。」

「ご案じくださいますな。われら、武士の世にほとほと愛想が尽きもうした。これから後は、刀持つ手に鍬を握り、草木の里に百姓として身を埋める覚悟をいたしました。朝夕城跡を眺め、菩提所の浄土寺をお守りしながら、土に生きる平穏な日々を送りとう存じまする……。」

送る者も、送られる者も、たがいに手を取り合い、抱き合って、これが今生の別れかと号泣し合うのでした。

屯田の地

さて、一色氏にとって替わった佐治氏は、再びこの地に城を築くことなく、部下の兵を配置して、農耕の傍ら非常に備えさせました。そうしたことで、隣接坂部で次第に勢力を伸ばしてきた久松氏と小ぜり合いはありましたものの、その七十年間の領有のうち、先住者と屯田兵たちの間に確執は起きませんでした。しかし、廃城となった竹林城の跡には、いたずらに夏草が生い茂るのみでした。

竹之越城

ところが、天文12年、今川氏と手を切り、新しく織田氏と結んだ緒川・刈谷城主水野信元は、坂部の久松氏に妹を再嫁させて盟約を結び、一挙に知多半島東海岸を南下し始めま

す。宮津新海氏の柳審城はたちまち陥落します。

すでに手中に収めていた板山から福住をおさえ、草木へも進出し、柏原に竹之越城を築いて、部将竹内弥四郎に守らせ、佐治氏に対抗させました。

しかし、それも約三十年後、織田信長の命を受けた佐久間信盛の軍によって、坂部の城と同じく落城の憂き目を見てしまうことになります。

草木の地は、戦国時代の前半百年足らずの間に三度も領主が替わりました。ですから、草木の城も、竹林城は二十年、竹之越城は三十年と、間に城のない七十年が入った、まことに短命な、まるで、まぼろしのような城であったわけであります。

しかし、その間の人々の出入りは、当地の人々の姓の違いになって、現在も残っております。

苗字の話

— 竹林城趾 —

明治の初め、平民も姓を名のることになったとき、人々は大変困ったらしい。結局は、先祖を尋ね、本家とのつながりを大切にして、それぞれの姓をつけることにしたようである。

草木地区について言えば、一色氏竹林城の家老池田嘉右衛門は池田の地名を残し、土着後、その直系の子孫は豪農として栄え、その分家やゆかりの家は、現在、池田姓を名のると考えられる。また、佐治氏の屯田兵としてこの地に帰農した人々の末は、平井・都築姓が多く、水野氏の部将竹内弥四郎に率いられてきた人々の末が竹内姓を名のっていると想定される。

ただし、明治の初めには、相当の混乱があったと思われるので、家紋も考えてみる必要がある。それは、昔は姓と家紋は深いつながりがあり、もし、同姓の他家と家紋が違う場合は、何らかの理由で現在の姓を用いたものと思われ、一度先祖調べをしてみるがよかろう。

第十四話

快翁禅師

時は永禄3（一五六〇）年5月20日の昼下がりでした。

昨日のできごとは夢だったのかと思うほど、穏やかな夏の日ざしが、まだ雷雨のあとを残す大地に照りつけていました。

ここ桶狭間では、引きちぎられ、土足に踏みにじられた幔幕や旗差物などが散乱している中で、大勢の百姓に織田・今川の足軽がまじって、汗を流し、よろけながら、大きく掘られた穴に、戦死者の死体を引きずってきては投げ入れておりました。

その傍らでは、多くの役僧を従えた、白く長い眉毛の老僧が、手を合わせ、数珠をもみながら、ねんごろに読経をしておりました。

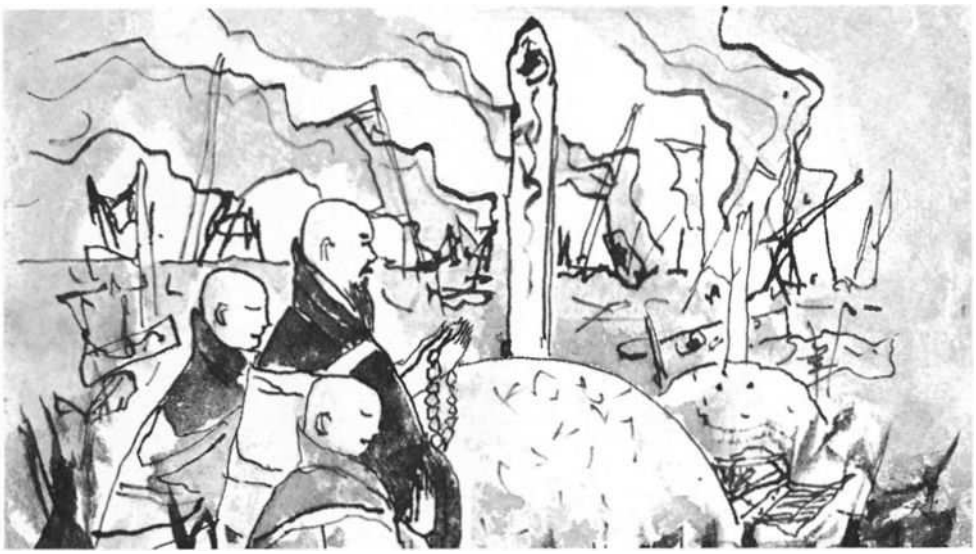
「快翁禅師さま、御大将の塚を築き終わりましてござる。」

「おお、それはご苦労でござった。ならば、ご回向を仕まつろうかの。」

老僧は、木の香りも新しい大塔婆の建てられた、ひときわ高い墓へ歩み寄ります。

四万余の大軍を率いて京都に上り、天下に号令しようとした今川義元は、尾張方の出城、鷲津・丸根の二城を落としたという報告にすっかり気をよくして、この桶狭間でゆったりと休息をとっていました。近習に大団扇で風を入れさせながら、彼の脳裏には、すでに、清州で待ち構えているはずの織田信長の姿などはありませんでした。

その時、一天にわかにかき曇ってきました。鋭い稲妻と雷鳴が交錯する中で、突然西のがけから、信長を先頭にする二千ほどの兵が、



喚声をあげて一気に駆け下りてきました。

この不意討ちで、今川勢は大混乱に陥り、わずかな近習の必死の警護のかいもなく、毛利新助・服部小平太の手で義元の首級はあげられてしまったのです。

それは、全く一瞬のできごとのように思われました。まるで悪夢を見たような一時でした。戦場には、今川方の無惨に踏みにじられた旗差物と塁々たる死体が横たわり、その数は、三千とも四千とも言われました。

そして、その翌日、織田信長は今川義元の首を丁重に駿府に返し、さらに戦場に、義元の塚と千人塚を築き、死体をねんごろに弔わせたのです。

この時、引導の導師を勤めたのが、大脇村の曹源寺を建立し、緒川乾坤院の住持ともなった快翁竜喜禅師という高僧で、草木の正盛院の開山となられた方です。

— 正盛院 —

快翁禅師は、文明11年、緒川・刈谷城主水野忠政の家臣中山又助の次男として緒川村に生まれた。緒川の水野家菩提寺乾坤院で出家得度した後、三河西明寺の実田和尚の後を継ぎ、大脇村曹源寺の建立に尽力した。

当町草木の正盛院は、天文12年、水野忠政の娘の志を受けて、当時天台宗の小寺を曹洞宗に改め、禅師が開山として建立したものである。その後、竜光寺・浄土寺を末寺とし、明治初め接収したが、仁王像は文化財に指定されている。なお、岡戸・知崎姓の家は、禅師の徳を慕ってこの地に土着した今川方の子孫とも言われている。

第十五話

おかんさま

「おかんさまは、お気の毒だなあ。」

「そうよ、何不自由のない、幸せな奥方さまと思っとったのにのう……。」

建てられて間のない草庵を眺めながら、草木村の人々はささやき合いました。

やせた松が数本、ひょろひょろと立っている丘を背にした庵の周りには、一面の枯れ草が風にそよいでいましたが、それでもその根元に数株のすみれが、ひっそりと紫の花をのぞかせていました。

おかんさまは、坂部城主久松俊勝の若い奥方でした。大野の宮山城主佐治家の姫君として生まれ、特に望まれて坂部のお城へ、美しく長い行列で嫁いできました。

青年の夫は、由緒正しい家柄にふさわしく実直な武将で、二人並んだ姿は、まるで内裏雛のようだと、城下の者は喜び合いました。そして間もなく、弥九郎信俊という、玉のよ

うな子にも恵まれ、いつも、城も里も春霞に包まれたかに見えました。

——ところが突然、二人の間に冷たい突風が吹き込んできたのです。

産後のなまめかしい女房の色を見せはじめたおかんさまが、居間で無心に眠るみどり子に、静かに風を送っているとき、表の城の座敷では、若い当主俊勝が家老の坂部藤十郎と二人きりで冷たい沈黙の中で対座していました。俊勝は、青ざめた額に縦皺を寄せ、畳に鈍く目をやっています。

「……殿、いかがなさるご所存で……。」

「……うむ、右衛門大夫どのより使者のおもむき、緒川に一味することは、それはよい。だが、おかんを離別することは、ならぬぞ。」

「なれど、お味方の証しとして、妹御さまを送られる所存の由、それをお断りなされてはまずうござる。」

「……。」

「あちらは、今、日の出の勢い。すでに有脇・板山へ進出され、福住・草木もうかがっておられる。攻められたら、この城、ひとたまりもござるまい。われら家臣どもの行く末ごときは慮外のこととしても、道真公より連綿と続く御家柄を、殿の御代に失わせられましては、ご先祖さまにいかが申し開きなさるか。」

「……。」

俊勝は苦しみました。

父忠政の急死を機に、織田氏と手を結んだ刈谷・緒川城主水野信元は、知多半島の南下を決意し、岡崎から出戻りの妹を嫁がせることを条件に協力を要求してきたのです。一戦を交えてみたところで、しょせんは玉砕させられる大軍です。

好いて好かれて、かわいい子までなした仲も、結局は、老臣たちの言うとおり、お家のためには、はかないきづなでしかなかったとは……。

戦国の世の女の悲しいさだめです。

「すまぬ。許してくれ……。」

「……弥九郎さまを何とぞ……。」

二人の間に短い言葉が交されました。泣いて泣きくれた後のおかんさまの顔は、能面のように青く澄んでいました。――

おかんさまは、庵の前の風にそよぐ一むらの草かげで、南の方へ目をやっていました。

激怒し、坂部城へ軍兵をさし向けようといきり立つ宮山城の父に、〝私のお腹を痛めた信俊がいます〟とすがったおかんさまは、まだ若い身そらで、緑の黒髪をおろし、草木の池田嘉右衛門に頼んで、北の丘を背にした草庵を建ててもらいました。未練と言われようとも、坂部城に少しでも近いこの地に、仏に仕える身を置いたのです。

おかんさまは、昨日庵を訪れた村人たちの話を思い起こしておりました。

「今度お城へ来られたお大さまは、三州岡崎

のお城へ竹千代さまという幼子を置いておいでたそうで。」

「それで、坂部のお城では、信俊さまを実の子のようにかわいがられ、ヨチヨチ歩きの信俊さまも、お大さまの行く先を追いかけられるそうな……。」

一時は、この身の幸せを奪ったお方と憎しみに燃えたあのお方も、実はわたしと同じ、悲しいさだめを持った戦国の女であった……。今となっては、温い親しみを感じて、かの女の涙をつづれ合わせたような真珠の珠数を巻いた白くか細い手を合わせて、南に向かって祈るおかんさまでした。

――そして、十数年の歳月が流れました。

坂部城の久松俊勝とお大の方が、成人して徳川家康となった竹千代に招かれて、三河の西郡の城へ移っていき、わが子信俊が坂部城主のあとを継いで、実家宮山城から姪を奥方に迎えたという便りを聞いて、一人の若い侍尼とわずかな村人に見とられただけで、四十一歳の短く悲しい生涯を閉じました。しかしその顔には、わずかな笑みが安らかに浮かんでいました。

戦国期までの阿久比

戦国以前の当地に関する文献は、伝説的なものを除いてはほとんどなく、今後の研究が待たれるが、和銅2年、地名に佳字を用いよということで英比と書かれ、英比郷の中心となった。初め公領であったが、平安期には皇室の荘園となり、英比荘と呼ばれることになるが、北部は皇室領・三宝院領・熱田社領など、転々と移動し、南部は長く熱田神宮領であったらしい。鎌倉時代には、実質は地頭小川氏の統治を受け、室町期は斯波氏、次いで一色氏の領有となるが、次第にその被官が台頭し、坂部に久松氏、宮津に新海氏が勢いをふるうようになった。

本話は、大野に勢力を伸ばしてきた佐治氏の姫が、小川水野氏の南下の犠牲となって坂部城を離縁される哀話だが、前町誌では、おかんさまを大高の水野大膳娘とし、他に正盛院開基お弁の方とする説あるも、知多郡史説に拠った。

第十六話

鎮守の神宝

永禄3（一五六〇）年の秋のことでした。

草木村の豪農多左衛門は、村の鎮守八幡社の境内にさしかかっていました。かれは毎朝、多賀神社から、このお社と、下隣の正盛院へ、五穀豊穣・村内安全の祈願に通うことを日課にしているのです。

振り返ると、草木川をはさんだ広い帯のような田は、すっかり取り入れが済んで、ただあちらこちらの水たまりがキラキラと輝いて見えました。今年も豊年だった……、満足そうに目を細めて眺めやってから、きびすを返したかれは、ふと、社頭にぬかずく一つの人影を認めました。

足音に祈りの静寂を破られたその人が振り返ります。

「なんと、これは……前田の若様ではござりませぬか……。」

「おお、多左衛門どのか。」

それは、二十を少し越したばかりと思われる雄々しい武士で、人なつこく白い歯並みを見せながら、なつかしげにほほえみかけます。

「まあ、若様、なんといたされましたか。若様は夏の初め、まるで鳥が飛び立つようにここをお出ましになったきりで、その後お姿も見えず、前田与十郎さまと、もしや、桶狭間か鷲津・丸根の戦いでと、毎日心配しておりました。ようこそご無事で。……それで、御殿様のお許しは出ましたのでござりますか。」

「……いいや、それが……。」

若武者の顔に、苦しみと悲しみの影がよぎります。

「この村を出てから、わしは殿の御ために、

いろいろと働いてきた。

ことに、あの桶狭間の合戦の際は、殿のそばをつかず離れず守護し、あの雷鳴とどろく中を、真っ先かけて突き入り、名ある大将首をあげて、勇んでおそばへ駆けつけたのだが

……、殿は冷たく顔をそむけたままであった。ならばと、再び敵の中へ駆け込み、いくつかの兜首をあげたけれども、ついにお誉めの言葉はいただけなんだ……。」

肩を落とした武者の頬に、涙が一すじ二すじきらりと流れました。

「……木下藤吉郎や兄者たち、水野どのや久松どのまで取りなしてくだされたのだが、きついお怒りは解けそうもない……。」

「……お力落としはなされまするな。いつかは、いっとお許しが出ましょうほどに……。」

「ここでしばらく縁者の前田与十郎どののもとに置いてもらって、そなたたちにもいかい世話になったが、近く美濃攻めにかかられるに違いないから、荒古で次の機を伺いたい。それで、多左衛門どのに頼みがある。これなる刀一振りと旗一流は、わしがこたびの戦に用いた品、戦勝御礼と心願成就を祈るため、ご神前に奉納したいと思うのだが……。」

「はい、確かに私がお預りいたし、末永くご神宝としてお守りいたしましょう。」

――多左衛門は、街道を次第に小さく遠ざかって行く馬上の影を目で追いながら、いつまでも立ちすくんでおりました。

草木と利家

―八　幡　社―

前田利家は荒古の出身で、永禄2年主君の寵童十阿弥を切ったため、織田信長の怒りに触れて追放されたが、永禄4年美濃の斉藤竜興攻略の戦功で許され、その後、数々の武勲によって信長・秀吉・家康に重任されて、加賀百万石の大名になった。正盛院過去帳に前田与十郎の名があり、家紋の梅鉢と共に草木との関係が深い。

利家が神宝を寄進したと言われる東八幡社は、社伝によれば、康正元年の創建、天正4年9月修復の棟札があり、昭和4年西社を合祀した。拝殿には大日堂鬼瓦を削って使用したという。

第十七話

お大の方

薫　風

天文16(一五四七)年の初夏、ここ坂部の城外では、かぐわしい薫風がそよそよと稲田を吹き渡っておりました。

「のう、お殿様が緒川から新しい奥方様を春先にお迎えになって、もうかれこれ三月になるかのう。おかん様のこともあって、なんとなく華やかなご婚礼も冷たく感じられたが、このごろでは、お城も村も、穏やかに落ち着いて、わしらまでなごんできたわ。」

「そうよのう。これも今度の奥方様のお人がらによるのかもしれんて……。」

「奥方様も、聞くところによると、おかわいそうなお方だそうな。初めてお嫁に行かれた岡崎のお城へ竹千代様という三つにもならぬかわいいお子を残して帰されたばかりということだ。」

「わしら下々の者には、事の次第はようわからんが、いくさというものはむごいものよのう……。」

「ご不縁になられたが十七歳というお若さでよ、岡崎のご家来衆が大勢泣きながら送ってこられたそうなが、国境で皆帰され、村の百姓衆に輿をかつがせたということだ。形原のお城を同じように離縁されたお姉上様を送ってこられた方々が刈谷で皆殺しにされなすったのとは大変な違いだと、三河だと、えらい評判だそうな。」

「お若いのに、情をよう心得しゃったお方よのう。……お殿様も、このごろは晴れやかなお顔にお見受けするし、前のお子、弥九郎さまもはしゃぎまわっておられるということだ。」

「ほんに、うれしいことだのう。物騒な世の中で、南では戦が始まっているが、おかげでここは、よい取り入れが出来そうだ。」

「あ、それで思い出した。先ごろ名主さまが城内へ呼び出されて、奥方さまから棉の実をいただいてこられた。綿を作って紡げと言われてな。」

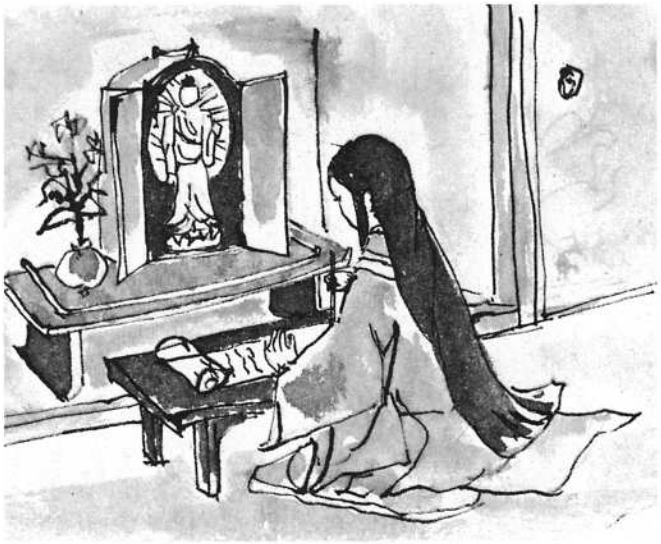
「そうかえ。それはありがたい。なかなか手に入らぬものを……。ほんにお心の深いお方じゃ。わしらも精を出さねばのう。」

面影

お大の方は、まだ木の香の漂う一室にひっそりと座っておりました。華やかな調度に囲まれたその部屋は、数か月前の婚礼のなまめかしさを残しつつも、城主の奥方の住まいとしての落ち着きを見せ始めておりました。

夫、坂部城主久松俊勝は、打てば響くよう

な岡崎の広忠とは違い、無口でずっしりした感じでしたが、誠実に傷心の新妻をいたわる優しい心配りを見せ、お大の方が岡崎から抱いて連れ帰った乳飲み子の姫も、この城へ引き取るよう計らってくれました。お大の方は、俊勝の広くたくましい胸がいつでも自分を強く抱き取ってくれる思いで、身も心も、城主の妻として新しく生きようとしていました。



ところが、新しい母になつき、まつわりついては全身で語りかけてくる信俊の姿に、またしても岡崎へ残してきた竹千代の面影を見てしまったのです。

兄水野信元の命に抗し切れず、去年刈谷の楞厳寺に再出発を誓ってこの城へ嫁ぎ、幸せをつかみそうに見えた彼女でしたが、それだけに、風雲急を告げる岡崎の孤児が思われ、か細い肩を落として、涙にむせぶのでした。

× × × ×

平和な阿久比の里は、黄金波打つ実りの秋を迎えておりました。

「お方よ。一大事となりそうじゃ。急使によれば、熱田に捕われの竹千代どのを岡崎衆が奪い返そうとする動きがあり、織田信秀どのは、いかいご立腹とのこと。竹千代どのの身にもしものことがあってはならぬ。そなたの

存念を聞かせよ。」
「殿のお心に甘えて、平野久蔵どの竹内久六どのに、熱田への心づけを届けさせていただきました。その上の重ねてのわがままにございますが、どうか、わが身に代えての命乞いに清洲へ参ること、お許しくださりませ。」
「おお、よくぞ申された。わしも同道して参ろう。急ぎ支度をいたせ。」
「はいっ……。」

再　会

「奥方様っ……。奥方様っ……。」
庭先でひそやかではあったが、せき込んで呼ぶ声に、お大の方は筆持つ手を止めました。
刈谷から持ってきた持仏の前には、ろうそくの火がかすかにゆらぎ、香の青い煙が一条、ゆるやかに立ち上がっていました。その前にしつらえた経机に向かって、お大の方は、このごろ日課としている血書の写経を進めているところでした。白磁の小皿には、小豆の汁で溶かれた彼女の指からしぼった鮮血が、残り少なくたまっていました。一字三礼、阿弥陀経を写しながら、薄幸の子、岡崎の竹千代と、夫俊勝のために、わが身を代えてと祈っていたのです。その写経も後少しです。
「……その声は久蔵どのか。何事でありますか。」
時は、永禄3年5月17日の昼下がり、坂部城は戦雲をはらんで、ぴいんと張り詰めた空気に包まれていました。
「奥方様、殿よりの内々の御下知でござる。ただ今、岡崎の元康さまがお見えになられました。」
「ええっ、竹千代が……。」
お大の方は、思わず立ち上がっていました。
坂部城主久松俊勝に添って、お大の方はすでに三十三歳。三児二女に恵まれ、夫に後顧の憂いを与えない、立派な城主の妻となっ

ておりました。

しかし、その彼女にも、薄幸の子の面影がいつもまぶたの裏に焼きついて離れませんでした。涙の別離から、すでの十六年。熱田から駿府へ、久六・久蔵や、玄応尼となった母お富の方を通じて、さまざまな品を届けてはきたものの、長い年月、一度も会い、抱くことのなかったわが子が、戦乱の敵地であるここへしのんで来てくれた——。涙のあふれるまぶたの裏で、ふと兄信元の顔がよぎって去りました……。

× × × × ×

元康は、両手を畳についたまま、ただひたすら母の顔を見つめていました。

駿府で世話になった祖母の顔から想像していたとおりの母の顔が目の前にある。

今川義元の命令で、だれの目にも無理と考えられた大高城への兵糧の運び入れを成し遂げ、明日の総攻撃を前に、ひと目でもよい、

まぶたの母に別れを告げたいと、敵味方と別れた伯父のはからいで、わずかな手兵と駆けてきた元康だったのです。

よちよち歩きに、よく転んでは泣いた、ずんぐりとした体で丸顔の竹千代が、こんなにりりしい若武者元康となって自分の前にひかえている。

お大の方は、体を小刻みに震わせながら、

「……お子が生まれましたそうな……。」

そう言っただけで、きらりと光るしずくを、膝の上で固く握りしめた手にしたたらせました。

縁の薄い母子は、言葉もなく、あいさつも忘れて、ただ見つめ合うばかりでした。

時間がない——。お大の方は、一心にわが子の食事を調え、元康は、黙ってそれをかきこみ、母も黙って見つめておりました。

そのとき、別間から、むずかり泣く乳飲み子の声が聞こえました。

「母上、元康には兄弟がおりもうした。どうぞ、お子たちをこれへ。」

お大の方は、はじめてわれにかえり、笑顔でうながす元康にちらとほほえみかけて、いそいそと立ち上がります。

× × × × ×

——短い夜はすでに東の丘の陵線をかすかに染め始め、菩提寺洞雲院でつき鳴らす鐘がいんいんと暁を告げておりました。

元康は、総攻撃に臨む張りつめた心で、心おきなく城門を離れようとしていました。そして、ひっそりとたたずんで、いつまでも騎影を見送っているお大の方の傍らには、戦場では命をかけて相戦うことになるやも知れぬ俊勝のたくましい体が、そっと寄り添っておりました。

松影

慶長7年8月28日、お大の方は、伏見城中

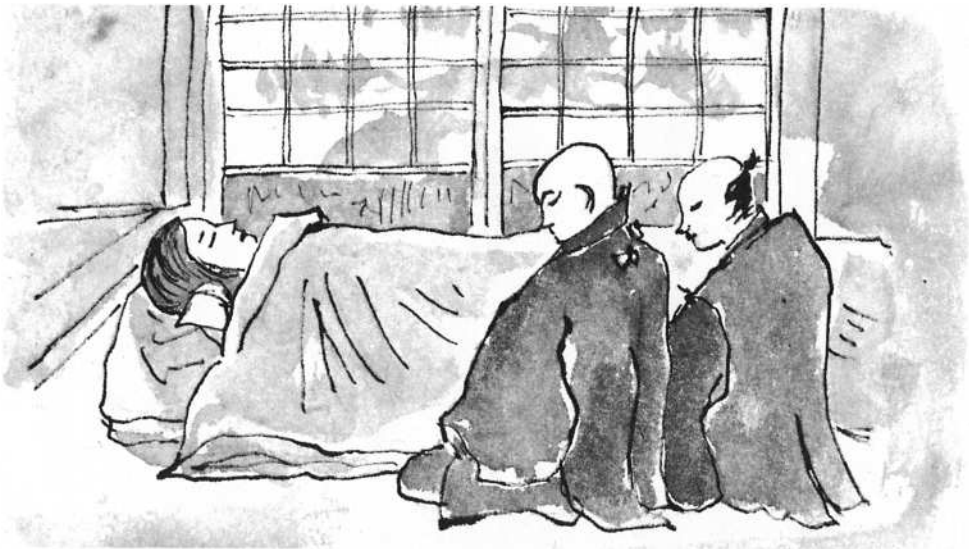
の豪華な一室に、静かに横たわっておりました。

関が原の戦いによって名実共に天下の棟梁となり、内大臣に任ぜられたわが子家康に2月に招かれて京を訪れていたお大の方は、内大臣の生母として後陽成天皇に閲し、高台院（秀吉の正室ねね）にも会い、子や孫に手をとられて京洛の見物を楽しんだのでしたが、7月の半ばに病臥の身となったのです。

家康はじめ、それぞれ一城の主となっている子供や甥たちの百方手を尽くしての医療看護も、朝廷の思し召しによる社寺での平癒祈願も、彼女の七十五歳の定命を延ばすことはできそうもありませんでした。

枕もとで息を詰めて見守っている人々の目をよそに、静かに瞳を閉じているお大の方の脳裏には、彼女の波乱に満ちた人生が走馬灯のようによぎります。

――今川義元の討ち死に後、岡崎城を取り



戻した家康は、西郡城主となった夫久松俊勝や忠誠一なき岡崎衆の決死の働きで、荒れ狂った一向一揆も甲州勢の怒涛も切り抜け、次第に頭角を現していった……。

しかし、天下を取った信長は、お大の願いをよく聞いてくれた兄水野信元を、こともあろうに、わが子家康に命じて殺させ、また、実の子として慈しみ、後事を託した久松信俊をも大阪四天王寺で切腹させた。幼い二人の孫を呑んで焼け落ちていった坂部城……。

――そして、あまりにも誠実なるが故に、信長と家康の仕打ちを怒り、長い流浪の末に憤死した夫の俊勝……。ただちに黒髪を切って、伝通院と号し、愛する夫や亡き人々の冥福を祈ろうとしたわが身……。

その後、幾度かの死地を切り抜けていく家康に乞われ、岡崎・浜松・駿府と、生母として居を移して行ったのだが、その家康も今では、天下の大御所としての貫禄を備えてきている。

――もう、私の手の届かぬ存在となった。

坂部城で生んだ康元は因幡守、定勝は隠岐守に、甥の水野勝茂は日向守と、皆一国一城の主ばかり。

――もう、私は用のない身となった。

思えば、十五年の短い歳月ではあったが、傷心の身を夫の翼に抱かれ、多くの幼な子に囲まれながら、必死になって岡崎に残した子を思い、仕送りを続け、血書までしてきた、あのころが、あの阿久比の里が、私にとっては、いちばんなつかしい……。

物音一つしない病室の明かり障子に、細長く尾を引いていた庭の松の枝影が、ひそと揺れたとき、お大の方は深々と沈んで行く意識の中で、思い出深い坂部城の一室に、夫俊勝に寄り添い、幼な子をあやしつつ、若武者竹千代と談笑している自分の姿を見て、にこにほほえんでおりました。

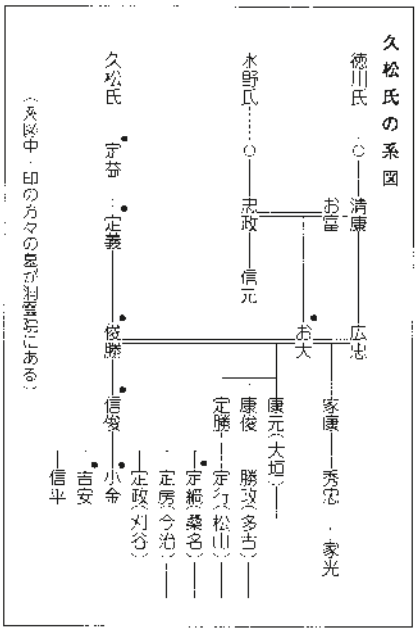
久松氏と伝通院

久松氏

藩翰譜によれば、久松氏は、菅原道真の孫雅規（英比麿）の子孫にあたり、尾張守護斯波氏の被官であった道定が阿古居を領したが、その後、一色氏から後継者が入り、定益に到って坂部城を築いたという。久松氏の系図については、久松家譜（洞雲院開基家系図）、浅羽本系図等もあるが、大名の系図作製に際しては、徳川氏をはじめとして、その遠祖の設定に苦心が払われたように伝えられている。

坂部城は天正5年7月、佐久間軍の攻撃で灰燼に帰するが、お大の方が生んだ子たちとその子孫は、将軍親政体制の確立と共に、神君家康の異父弟、その子孫として、松平姓を名のり、御三家、御三卿に次ぐ重要な一族として処遇された。

久松氏の系図



（系図中・印の方々の墓が洞雲院にある）

伝通院

伝通院お大の方については、昭和57年、本町作成の映画「ここに母ありて」で紹介されているが、戦乱の時代にあって、徳川家康に大きな影響を与えた生母として、江戸時代はもちろんのこと、現代でも、史書・文壇にしばしば登場している。

お大の方が当地に在住したのは、約十五年であるが、家康が坂部へ来訪したのは、永禄3年5月17日で、久松宅に一泊して生母お大の方に会い、その三人の異父弟に対して、自分には兄弟がないから、この弟たちに松平の姓を名のらせ、連枝の扱いをしようと語ったといわれている。お大の方は、落成したばかりの城で死亡、遺体は江戸に送られ、盛大な葬儀のあと小石川の伝通院に葬られたが、洞雲院にも遺品と墓所がある。

第十八話

舟橋の姓

時は天正10（一五八二）年6月の半ば、大野街道を東に、蓑笠で身を包んだ十人あまりの武士の集団が、主君らしい、かっぷくのよい人物を前後左右用心深くとり囲んで、ひたひたと歩みを進めておりました。

「殿、大野の港へ上がられましたは、まことにご賢察でござりました。噂では、先回の例を聞き知ったか、明智方は間者を常滑の港に張り込ませておりましたとか……。」

「そうか……。しかし、実はのう、そちも知っていようが、この地は余の生母の再嫁先で、桶狭間の戦いの直前、元康であったころ、忍んで尋ねてまいったなつかしい所ゆえ、ここだけは無事通してくれるであろうと思ったまでじゃ。」

「さようでござりましたな。そういえば、油断はなりませぬが、なんとのう心安まる気がいたしまする。……さて、これより、いかがいたしたものでござろうか。」

「本多、余は成岩の常楽寺へひとまず入り、そ

の上で三河へ戻ることにしたい。どこぞで、舟と心きいた船頭を探してきてくれぬか。」
「はい、委細かしこまってござる。」

織田信長が本能寺で明智光秀に不意討ちされたのは、天正10年6月2日のことでした。その時、徳川家康は泉州堺におりましたが、密偵の急報で、ひとまず三河へ帰り善後策を考えようと決心し、伊賀を越え伊勢へ出て、白子浜から小舟で大野へ上陸したのですが、明智の兵や野盗の襲撃を受けて、その逃避行はさんざんなものでした。

「殿、船頭を召し連れました。この者は宮津村の新海八郎左衛門と申され、以前は武家なりし由、土地のたばねもいたしており、心許せる者と察せられましたので、腹をうち開けて頼み入りましたるところ、心よく承引いたしくれました。」

「おお、そうであったか。おおかたは聞き知ってくれたであろうが、余は家康じゃ。よしなに頼み入るぞ。」
「もったいないお言葉でござりまする。わが家は柳審城主の一族にて、落城の後もこの地を離れず、刀取る手に鍬を持ってはおりまするが、武士の心は忘れておりませぬ。
この度の殿のご危急、この八郎左衛門、わが身に代えても、無事お送り申し上げる所存、心安くおぼしめされませ。」
「かたじけない。家康、そなたの恩義、終生忘れぬぞ……。」
こうして、新海八郎左衛門の漕ぐ舟に乗った家康一行は、半田薬師下から成岩へ出て、常楽寺へ立ち寄り、さらに対岸の大浜へ帰り着くことができました。家康は八郎左衛門の手を取り、その労をねぎらい、今後は新海姓を改めて舟橋と名のってくれと言い残し、岡崎へ向けて去って行きました。